

清末小説から 125

2017.4.1

いくたびかの阿英目録16.....樽本照雄 1
『瑞西独立警史』について1 漢訳「スイス独立史」.....沢本香子 9
晩清民国时期《金银岛》汉译本考述.....付 建舟16
商務版「説部叢書」試行本.....神田一三22
瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の嘘.....樽本照雄24
清末小説から15、21、29

沢本香子「『瑞西独立警史』について」は3回で完結予定です。樽本『清末小説二談』ほかの著作の電字版が本研究会ウェブサイトからダウンロードできます。ご覧ください。まだま罍

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録16

樽本照雄

中国学界において権威であるということ

『繡像小説』の発行遅延問題

清末文学研究の分野では、阿英は先駆者、開拓者のひとりである。その積極的で広範な資料収集により豊富な蔵書を築いた。書籍の実物にもとづき、堅実な立論を多く公表した。彼は、中国の学界において長年にわたって學術権威の

地位を維持してきたのである。

中国で権威があるとは、どういう意味か。具体的に説明する。

ひとつは、基礎資料として利用される。たとえば、文学年表を作成するときの典拠となる。

例を示す。鄭方沢『中国近代文学史事編年』(1983)*³⁸がある。1882年の項目末尾に、阿英目録を使用すると宣言する(129頁)。すなわち、1913年までに刊行された創作小説、翻訳小説および戯曲について、出典を明記していないものはすべて阿英目録1957年新1版(増補版のこと)によっている、というのだ。また、ところどころで阿英目録にもとづいて統計数字を独自に算出する。某年では創作小説が何種、翻訳小説が何種というぐあいだ。

阿英目録以外には信頼できる清末小説についての目録が存在しなかった。そう考えれば鄭方沢の採択した方法も理解できる。

だが、2015年時点でそれをくり返すのはいかなものかと思う。次の年表のことをいっている。

林分份、黄育聡主編『中国現代文学編年史』第2巻(2015)*³⁹だ。「阿英『晚清戯曲小説目』の統計によれば」とことわって創作小説と翻訳小説の数字を提出する(37、70、87頁)。32年前の鄭方沢と同じ方法である。阿英目録を量的に上まわる目録はすでにいくつか刊行されているにもかかわらずだ。樽目録第3版(2002)、劉永文編『晚清小説目録』(2008)、樽目録第6版(2014)、陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(2014)などが出ている。林黄は、それらを見ても阿英目録を前面に押し出したらしい。阿英が研究界の権威になっている事実をこういうところに見る。

もうひとつ。阿英の著作を引用するほかの研究者についていうと、ある一定の反応が予想される。つまり、権威に対して人々は疑問をいだかない。私はそう理解している。

阿英が書いた文章、あるいは編集した小説目録に誤りが含まれているとは考えない。そういう意味だ。同じことをくり返している。

阿英目録は、『繡像小説』掲載の作品をすべて収録しているわけではない。おおまかな数字だが、収録率は約26%だ。少ないと意外に思われるだろうか。ここはその不徹底さをいうよりも、雑誌掲載の作品を採取した阿英の英断を高く評価すべきだと私は思っている。

阿英以前では、小説目録に掲載される主体は単行本であった。それも当然で、雑誌という形態は存在しなかったからである。清末に突然出現したのが新聞雑誌だ。一般にいう目録採取の対象にはなりえなかった。阿英が雑誌に注目したのは、彼のすぐれた研究感覚によるものだ。清末が雑誌の時代であることを見抜いていた。その判断は高く評価できる。私は過去において指摘している。ただし、つけ加えると新聞までは手が回らなかった。

阿英目録では、各作品の刊年について月日を示さない。「光緒癸卯(1903)」とおおまかな年を書くだけのこともある。角書を書かない。

期数を無視する。その結果、阿英目録によって実際に作品を検索するばあい、すこし手間取る。まあ、樽目録を見れば簡単なことなのだ。すこし自慢した。

樽本「繡像小説総目録」(1973)*⁴⁰を作成した時のことだ。ひとつの問題に直面した。

半月刊『繡像小説』は、表紙裏(表2)目次部分に刊年を表示している。創刊号は、癸卯五月初一日(1903.5.27)だ。ところが、第13期よりその刊年が消失する。終刊の第72期まで発行年月日の記載はいっさいない。おかしなことがあるものと思った。これでは終刊時期を特定することができない。

しかし、すべての先行文献はその終刊年月日について、見解が一致している。丙午三月十五日(1906.4.8)だという。一度もぶれたことがない。本来は存在しない記載が、あることになっている。不思議なことだと感じた。

主編の李伯元が死去したのが、同年三月十四日だ。その翌日に第72期が出た(ことになる)。わずか一日(旧暦だからこう表記する)違いにすぎない。月日を並べれば、そうなる。

李伯元の死亡と『繡像小説』の終刊がほぼ同時であるのは、あまりにもできすぎている。偶然のこととは思えない。この両者は無関係ではない、と考えるのが自然の流れだ。私は有意だと考えた。自分で作成した「繡像小説総目録」において、第13期以降の刊年についてはすべて「日付ナシ」と明示している。ただし、半月刊が守られたばあいの日付も併記した。あくまでも参考のためだ。とはいえ、その推測は正しいだろうと考えていた。

調べれば、『繡像小説』刊年の明記(あとで誤りと判明するのだが)は、さかのぼると阿英の説明(1936)に行きつく(傍線省略)。

「繡像小説」刊于癸卯(一九〇三), 丙午(一九〇六)停刊, 李伯元主編, 半月刊, 商務発行。*⁴¹

阿英『晚清小説史』(1937)を軸において見る。その1年前の著作において上のように説明しているのだ。癸卯(1903)年に創刊して丙午(1906)年に停刊した。1930年代という早い時期に、『繡像小説』に関する阿英の見方は完成している。今から考えれば、丙午(1906)年停刊が微妙なところだ。

阿英はそのあと、少しの、ただし重要な意味を持つ変更を加えてくり返す。1958年の説明だ。

始刊於光緒癸卯(一九〇三)年五月，至丙午(一九〇六)，因伯元逝世休刊，共七十二期。^{*42}

以前は停刊が丙午(1906)年だと曖昧にしか説明していなかった。ところが、停刊の原因を「因伯元逝世休刊」だところではっきりと書いている。李伯元の逝去と雑誌停刊を結びつけた最初の研究者が、阿英だった。

当時は、私も阿英の解説に同意していた。阿英がそうしているから、学界の権威だから、というわけではない。自分なりに考えて出した結論だ。それがたまたま阿英説に一致しただけ。なにしろ阿英説を否定する材料が、もとからどこにもない。異論がでてくる余地はないと思った。

魏紹昌の暴走

魏紹昌は、阿英のとなえる『繡像小説』定期発行説(従来からある見解。発行遅延説はまだ提起されていない時期のもの)を信じた研究者のひとりだ。固く信じるあまり、彼はとんでもない行動をとった。他人の手になる先行文献の記述を勝手に書き換えたのである。よりもよって終刊の年月に係る。

その被害にあった文献とは、畢樹棠「繡像小説」(初出は『文学』第5巻第1号1935.7.1)だ。いま問題にしているのは、つぎのもの。魏紹昌

編『李伯元研究資料』(1980)^{*43}に収録された。魏紹昌が資料集において畢樹棠のものだといわゆる原文を引用する(下線樽本)。

共出七十二期，停刊於光緒三十二年(丙午)三月，只有三年的歴史 462頁

魏紹昌資料のここだけを読めば、畢樹棠は阿英よりも前に定期発行説を唱えていることになる。記述は、李伯元の死去とからめてはいない。だが、丙午(1906)三月停刊と説明しているところは、阿英に先行する。

しかし、畢樹棠論文の初出を見ると驚かすにはいられない。畢樹棠の原文は、上のようになっていないからだ。下線部分の元文章を示す。

(停刊)年月不明、約在光緒三十二三年之間

畢樹棠は『繡像小説』の停刊年月を不明としている。これこそが『繡像小説』の原物を見ている人の冷静で客観的な記述だ。推測して光緒三十二(1906)年から三十三(1907)年の間であるとした。刊年不記なのだから妥当な見解だといえる。

魏紹昌にとっては、『繡像小説』の定期発行説は盤石だった。そう考えて間違いない。阿英の指摘があるではないか。それが理由だろう。魏紹昌は「親切心から」自分で考える「正しい」記述に書き直しておいた、というくらいのところではなからうか。そうならば、せめて注をつけるべきだった。

だが、彼は断わりなく資料の文面を無断で書き換えた。捏造したといわれてもしかたがない。研究者としてやってはならない種類の行為である。誰が見てもあきらかだ。のちの研究者が資料の文章を書きかえるほどに、阿英の『繡像小説』定期発行説は堅固なのだ。そういうこともできる。

魏紹昌の資料改竄について私は何度も注意をうながしてきた。ただし、主として日本語での論文執筆だからそれに気がつかない中国人研究者がいてもおかしくはない。

魏紹昌の意図的な書き換えに騙されたのは王文君だ。論文「再議《繡像小説》的停刊時間 読《申報》刊《繡像小説》広告札記」(2016)*44に見ることができる。

王文君は次のように記述する。「畢樹棠は、『繡像小説』の停刊時期を「停刊於光緒三十二年(丙午)三月」だと書いている」(124頁)

魏紹昌の細工に見事とっていいほど騙された。それをもって王文君を一方的に被害者、犠牲者というのは当たらない。なぜならば、文献の初出を見るという研究の基本を実行しなかったからだ。くり返す。王文君が間違っただのは、畢樹棠の初出文章を確認しなかったのが原因だ。魏紹昌が編集した専門資料集を疑うことなく信用したのだった。

阿英は李伯元の死去と『繡像小説』の停刊を証拠もなく結びつけた。魏紹昌は畢樹棠の文章を勝手に書き換えた。中国の著名な研究者がなぜここまで勝手なことをするかな。

張純が登場する

しかし、慎重に観察する中国人研究者がいた。張純は、その論文「關於《繡像小説》半月刊的終刊時間」(1986)*45において、発行遅延説を打ち出す。今から30年以上も前のことだ。

その理由、証拠は、『繡像小説』に掲載された作品の中にあった。ある作品は日露戦争の開始を書き込んでいる。

日露開戦は、旧暦の癸卯十二月二十五日だ。これは動かすことができない。

該誌第15期掲載の「詠日俄交戦也」が、その事実を反映している。従来から考えられていた第15期の刊年は、癸卯十一月初一日である。日露戦争が始まる約二ヵ月も以前ではないか。戦争開始以前に、言及することはできない。当た

り前だ。時期が一致しない。あきらかに矛盾している。そこから、実際の刊行が遅れ気味であったことを張純は指摘した。

私は、張純論文を読んだ。今まで考えもしなかった問題提起だった。自分なりに結論づけていた定期発行説が、張純によって否定されたことになる。

ここは腰を落ち着けて考える必要があった。張純は作品内部に反映された歴史的事実をすくいあげて証拠としている。彼の論文を何度も読んで検討した。刊行が遅れていたことは間違いなさそうだ。

発想を転換する

発行遅延の事実を客観的に証明する方法はないか。私は考えた。

張純とは別の方向から問題に接近して発行遅延説を検討してみることにした。誰が見ても動かない、かつ信頼できる証明資料を探すことだ。彼と同じやり方では、研究する意味がない。

張純が作品内部から出発するならば、私は雑誌外部から接近する。そのような資料は、存在しているのか。日本で入手できるだろうか。

そうして到達したのが、当時の新聞だ。

日本で中国の新聞を調べていた。そこに『繡像小説』の刊行記事が掲載されていたのを見つけたことがあった。それを思い出したのが発端だ。

繡像小説総目録を作成したあとも、刊年を確定するものがないか調査を継続していた。そのときは、まさか刊行に遅延があるとは思っていない。創刊号についての新聞記事を発見してそれで終わっていたのだ。そういう経験があった。そこから生まれた連想をたぐる。新聞が資料に、判断材料にならないか。新聞には年月日が明記されている。資料として利用価値が高い。

上の『繡像小説』創刊を知らせる新聞記事とは、上海の癸卯(1903)五月初七日付『同文瀆報』のことだ。私は国会図書館所蔵の該紙を調

査したことがある。

当時上海の新聞社は、出版社から書籍雑誌を受贈することがあった。新聞社は、具体的に書名を掲げて記事にしていた。たまたま新聞を閲覧していてそのことに気づいた。また、商務印書館が新聞広告に力を入れていたこともわかった。読者の興味を引き出す目的で宣伝のために出版広告を出稿していたのだ。

『同文滬報』の該号には、『繡像小説』創刊号を贈呈してもらいました、と記事が掲載されている。これにより、創刊号に印刷された五月初一日は虚偽ではないと推測できる。参考までにつけ加える。はるか後年に『同文滬報』よりも二日ほど先行する五月初五日付『新聞報』と『中外日報』の記事があることが指摘された。

広告でもかまわない。『繡像小説』の刊行に關係する情報がほしい。

雑誌刊行に關係する新聞記事、広告をできるだけ集めることにした。作業の途中で、ある中国人研究者(張純のこと)は批判していった。新聞広告は嘘が多い。つまり、資料として信頼できない、といたかったようだ。宣伝内容は誇張することがあるかもしれない。だが、雑誌の発行年月について偽りを広告することはないだろう。出版資料として信頼性に欠けるわけではない。私は、そう反論して張純の意見を却下した。新聞の閲覧を継続する。

注目すべきは、当時は新聞を資料に使うことに反対した中国人研究者が実際にいたことだ。1980年代前半において新聞の出版広告に注目する研究者は日本中国を通じてほとんどいなかった。

ずっとあとの2013年に中国で新聞雑誌広告を主にした近代文学史が出版されるのを見ると、隔世の感がする。

『同文滬報』の実物が日本に所蔵されていることを知ったのは、故中村忠行先生からのご教示があったからだ。以下のような話だった。

その昔は、上野図書館(帝国図書館の通称)

に所蔵されていた。中村は、資料として該紙を利用していた。古紙からでるホコリにまみれるから、文字通り真っ黒になる。ところが、図書館では、あまりにも分量が多く古いものだから処分したがっていた(私の記憶ではそうだ)。中村は、その貴重性を力説し、廃棄処分するのをやめてもらった。今でも日本に所蔵されている経緯だ。

そう、聞いた。ありうることだ。

私は清末の小説家に関する記事はないか、と自分なりに閲覧を続けていたのだ。『繡像小説』の発行遅延問題が発生する以前だった。

夏期休暇を利用して東京の国立国会図書館にかよった。『同文滬報』は上野図書館から移動されていたからだ。まだ新館が増築される前の話になる。空調工事のため冷房が停止していた。大汗をかきながら原紙のページをめくるほかない。その後、科学研究費が当たったのを利用して縮小写真の作成を依頼した。そのたびに東京に行く必要がなくなる。手元があれば、いつでも好きなときに利用できる。複写にあたっては図書館側から要求がひとつ出された。国立国会図書館に縮小写真1組を無償提供する(つまり複写費用すべてはこちら負担)という条件で複写の許可が出た。費用をかけずに所蔵資料の複写写真を作成する。どこの図書館でも行なっている。依頼者側の私にも文句はない。双方がうれしい方法だと理解した。

手元の『同文滬報』縮小写真(当時は個人研究室に置く)をあらためて見る。附属の文藝副刊ともいべき『消閑録』も同時に調査する。

『繡像小説』の受贈記事は、創刊号に関するものを除いてはみつからなかった。手間ヒマがかかるのである。結果としてはほとんど収穫はなかったに等しい。そうとわかっただけ。しかし、徒勞だとは思わない。努力を積み重ねるしかないではないか。

今から考えると、長期間にわたり地道な作業によっても従事したものだ、と自分ながら感心す

る。体力がなければ続かない。収穫があるかどうかは不明なのだ。やってみなければわからない。そのような一見ムダに見える努力をする人間は、当時中国にもいなかった。断言してもいい。年月日不明の記事を探すのは、日付が判明している記事を読覧するよりも数倍の精力を消耗する*46。

四

【注】

- 38) 鄭方沢『中国近代文学史事編年』長春・吉林人民出版社1983.11
- 39) 林份份、黄育聡主編(劉勇、李怡総主編)『中国現代文学編年史』第2巻(1906-1915)北京・文化藝術出版社2015.11
- 40) 樽本「繡像小説総目録」『大阪経大論集』第93号 1973.5.15
- 41) 阿英「清末小説雑誌略」『小説閑談』上海良友圖書印刷公司1936.6.10。54頁
- 42) 阿英『晚清文藝報刊述略』上海・古典文学出版社1958.3。17頁
- 43) 魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980。12所収。462-468頁。掲載雑誌『文学』の発行を1935年9月と誤る。
- 44) 王文君「再議《繡像小説》的停刊時間 讀《申報》刊《繡像小説》廣告札記」『中国海洋大学学报(社会科学版)』2016年第2期 2016.3.10
- 45) 張純「關於《繡像小説》半月刊的終刊時間」『徐州師範學院學報』1986年2期 1986.6.15
- 46) 論文のいくつかを以下に紹介する。

樽本「『繡像小説』の刊行時期」『中国文芸研究会会報』第55号1985.9.30、5-10頁。要旨：『繡像小説』の創刊が光緒二十九(1903)年五月初一日であることは確実である。しかし、雑誌は途中で発行年を記載しなくなる。従来は、月2回の発行が守られたとし、李伯元の死去により停刊したのが光緒三十二(1906)年三月十五日だということになっていた。ところが、張純によるとその停刊は、1907年に遅れていたという。私はそれに対して別の考えを提出する。当時の天津『大公報』、『同文滬報』、『東方雜誌』を資料にし、その広告などにより『繡像小

説』の刊行が徐々に遅れていたことをより精密に推測した。停刊は、光緒三十二(1906)年末だと結論する。李伯元死去後も雑誌は発行されていた事実が出現したのだった。

樽本「気になる『繡像小説』の奥付」『中国文芸研究会会報』第59号1986.5.31、1-3頁。要旨：『繡像小説』発行遅延問題研究の一部である。奥付に見える販売取次所の広告に変化が見える。世界繁華報館の名前が消失するのは、李伯元の死去に関係することを述べる。

樽本「中国第一本専登小説的期刊『繡像小説』編者疑案」台湾『中央日報』1991.8.20。要旨：(中国語)原題「《繡像小説》編者討論」。1980年代、中国大陆でくりひろげられた『繡像小説』の編者をめぐる論争は、汪家燊の立論を樽本照雄が批判することによってはじまった。雑誌の編者問題から「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件に発展し、最後には南亭亭長が李伯元と歐陽鉅源の共同筆名であることが明らかになる。この一連の論争を概述する。「二十世紀中国文学」研討会報告用に書いたもの。該紙に先に発表されるとは知らなかった。事前に掲載の相談はない。

樽本【国際学会発表】「《繡像小説》編者討論」二十世紀中国文学 台湾、香港、日本三地学術交流 台湾・国立台湾師範大学1991.8.20。(中国語)。のち、『二十世紀中国文学』台湾・学生書局1992.1所収

樽本「南亭亭長の正体 『繡像小説』編者論争から始まる」『清末小説』第14号1991.12.1、1-15頁。要旨：『繡像小説』の編者は誰か。論争の発端である。汪家燊は李伯元ではないといい、私は李伯元だと断定する。その証拠は、『繡像小説』に掲載された「文明小史」と「老残遊記」の盗用事件である。「老残遊記」の原稿から盗用できるのは編者李伯元だけだ。その李伯元が死亡後も盗用がなされているという事実は、従来考えられていた筆名南亭亭長=李伯元という図式に再考をせまる。つまり、南亭亭長は、李伯元と歐陽鉅源の共同筆名であることを論証する。

樽本「『繡像小説』の刊行時期ふたたび」『野草』第52号1993.8.1、129-144頁。要旨：『繡像小

説』の刊行が遅れていた事実を、新聞、雑誌の記事、広告から特定する。従来の定説は丙午1906旧曆三月終刊である。中国の研究論文はすべてこの説に追隨しているが、それは誤りである。諸資料は、光緒三十二(1906)年年末終刊を示している。『繡像小説』刊行一覧を掲げる。

樽本「『老残遊記』和『文明小史』的關係」『大阪経済大学教養部紀要』第11号 1993.12.31、(中国語)31-44頁。要旨：『老残遊記』と『文明小史』は、『繡像小説』という同一の雑誌に連載されている。『文明小史』には『老残遊記』の原稿から盗用した部分があり、この盗用関係を雑誌の発行情況をからめて探求する。済南で行なわれた劉鉄雲国際学会で発表した論文である。附録：『繡像小説』刊行一覧。『清末小説研究集稿』2006.8所収

樽本「『繡像小説』の刊行時期みたび 張純氏に答える」『清末小説から』第34号1994.7.1、2-7頁。要旨：『繡像小説』の終刊は光緒三十二(1906)年年末だと私は予測している。中国の研究者張純より、1907年だと反論があった。張純の論拠を逐一点検し、それらがすべて誤っていることを検証し再反論する。

[日]樽本「『繡像小説』出版延期問題簡論」『出版史研究』第2輯 北京・中国書籍出版社1994.11、(中国語)119-122頁。要旨：『繡像小説』の刊行が遅れていたという説は、重要な問題にもかかわらず中国の学界では注目を引かない。中国語で意見を発表すれば事情が変化する、と汪家熔氏に勧められる。要点のみを述べた文章を氏の編集する雑誌に投稿した。

樽本「『繡像小説』の重版 小説雑誌の重版問題1」『清末小説から』第57号2000.4.1、3-12頁。要旨：清末時期に創刊された小説専門雑誌は、重版された事実がある。読者に歓迎された証拠だ。しかし、研究界において雑誌の繁栄を指摘するのは普通ではあっても、その重版をいう研究者は、多くはない。その理由を考えるに、原本そのものを手元に置いて調査研究する人がいないためだろう。原本に当たれば、創刊号と称するものの中に、表紙が異なるばあいがある。原稿募集広告を例にとれば、初版創刊号には掲載されていないが、重版創刊号には、掲載されていることがある。重版の事実を知らず、重

版にもとづいて創刊号から原稿募集を行っていたと記述するならば、それは事実から離れる。重版の事実を『繡像小説』に紹介する。原稿募集広告は、当時の文人に原稿料制度が形成されつつあることを知らせることもなった。職業作家の誕生を経済的に成立させた条件でもある。まさに中国文学史上、空前のできごとでもあるのだ。

樽本「李伯元は死後も『繡像小説』を編集したか」『清末小説から』第64号2002.1.1、1-12頁。要旨：『繡像小説』全72期は、李伯元の死去と同時に停刊した。これが、中国の学界における定説である。ひとつの例外もなく、長年にわたってくりかえしそう主張されてきた。これに対して、異議を唱えたのは、中国では張純であり、日本では樽本照雄である。昨日今日、新しく異議がとなえられたというわけではない。しかし、『繡像小説』発行遅延説は、中国の研究者が認めるものとはなっていない。研究者が認めなくとも、事実が存在する。『繡像小説』第13期より発行年月を記載しなくなる。当時の新聞『中外日報』『申報』に掲載された『繡像小説』に関する出版広告を丹念に拾っていけば、あきらかに発行が遅れていることがわかる。きわめつけは、李伯元が死去した光緒三十二年三月十四日以降も『繡像小説』第53期よりあとの号が発行されている事実があることだ。同年十二月によやく全72冊の刊行終了が宣言されている。『繡像小説』の発行遅延は、それだけにとどまらない。李伯元の作品であるとされている『文明小史』『活地獄』『醒世縁彈詞』のあたり部分は、李伯元の死後の発表となるのだ。にわかには「偽作」説が登場することになる。従来の自説を、『中外日報』『申報』の出版広告を追加し、あらためて検証した。

樽本「李伯元の肺病宣言 『繡像小説』発行遅延に関連して」『清末小説から』第69号2003.4.1、1-13頁。要旨：李伯元の死因は肺結核であることは定説になっている。主として友人の証言による。このたび李伯元自身が、光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文を掲載し、みずからが肺病であること、招宴を断わる宣言をしている事実を発見した。新出資料である。李伯元が肺病であったことの確証となるばかりか、『繡像小説』の刊行が遅

れていた事実と関連するから、さらに資料的価値があります。すなわち、李伯元の肺病は、彼の死因となつていると同時に『繡像小説』の恒常的発行遅延の原因だということになるからだ。

樽本「『繡像小説』出版遅延問題簡論日本語原稿」『商務印書館研究論集』清末小説研究会2006.12.15、181-182頁。中国語原稿の元原稿(日本語)。

樽本「『繡像小説』研究の現在」『清末小説から』第89号2008.4.1については後述。

樽本「『繡像小説』問題」『清末小説から』第96号2010.1.1、17-18頁。要旨：汪家燊が『繡像小説』主編問題をまた蒸し返している。『中国出版通史』7清代巻(下)(北京・中国書籍出版社2008.12)において主編は李伯元ではないという自説を展開する。すでに問題を解決する資料が提出されているにもかかわらずだ。版元である商務印書館が新聞広告で李伯元を雑誌の主編に招いたと宣伝した。その動かない証拠を汪家燊は否定するのである。研究の基本をないがしろにしていると言わざるをえない。

樽本「『繡像小説』問題はどう論じられているか」『商務印書館研究文献目録』清末小説研究会2010.6.1 清末小説研究資料叢書13、38-55頁。要旨：『繡像小説』については編者、発行遅延、盗用の問題が存在する。研究者は、それらの問題をどのあたりまで把握しているのか。李伯元研究から、張仕英と王学鈞の著作を取り上げて検討する。『繡像小説』研究からは、王燕と郭浩帆の論文をとりあげる。さらには、文迎霞、汪家燊の論文も視野に入れて評価一覧表を作成した。

樽本「『繡像小説』問題2」『清末小説から』第99号2010.10.1、1-6頁。要旨：『繡像小説』問題とは、編者、発行遅延、さらに「老残遊記」と「文明小史」の盗用事件である。主編者が李伯元であったときに、「老残遊記」の没書事件が発生した。ところが、その没書になったはずの内容が「文明小史」に盗用されている。では、盗用したのは李伯元だったのか。これに『繡像小説』の発行遅延という事実がからむので問題が複雑になる。事實は、李伯元の死去後に問題の「文明小史」第59回が発表されているのだった。死者が原稿を書くことはできない。李伯元にかわる人物がいたはずだ。それは欧陽鉅源で

あるというのが従来からの私の主張である。盗用事件について、もういちどの経過を整理しなおした。

樽本「貴重な出版史料のひとつ 『繡像小説』主編を示す商務印書館の新聞広告」『清末小説』第34号2011.12.1、117-119頁。要旨：『繡像小説』の主編は李伯元である。当時の新聞広告に発行元の商務印書館がそう書いている。この事実を汪家燊は、認めようとはしない。あいかわらず、主編が誰かは不明だ、と主張している。彼が編集する『中国出版史料・近代部分』補巻下冊477頁にも間違ったことを注釈に書いた。それが間違いであり、該書に収録すべき新聞広告であることを指摘する。商務印書館の広告影印を添付する。

樽本「王文君氏へ 『繡像小説』発行遅延問題について」附：『繡像小説』刊行一覧 『清末小説から』第114号2014.7.1、37-42頁。要旨：王文君が『繡像小説』の刊行遅延説について調査した。その結果、樽本の示した『申報』広告の記事掲載月日に不正確な箇所がある、と批判するのだ。その事実を認める。ただし、いくつかの誤記は、刊行遅延説を否定するまでにはいっていない。誤差の範囲内におさまる。王文君に反論して、目先の事実精密であろうとして、調査を行なう本来の目的を見失った、という。なんのために調べるのか。樽本説を否定できる新しい発見がないではないか。

なお、王文君の別論文「再議『繡像小説』的停刊時間 読《申報》刊《繡像小説》広告札記」(2016)については、本稿で触れた。また、樽本『清末小説二談』(2017)の657-660頁をご覧ください。

次号の公開は2017年7月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

『瑞西独立警史』について1
漢訳「スイス独立史」

沢本香子

本稿において『瑞西独立警史』(以下『警史』と略す)の底本を明らかにし内容を検討する。

本稿の副題は、別稿と同じに「漢訳「スイス独立史」」とした。「建国史」に交換できる。また「漢訳「ウィリアム・テル」」でもよろしい。

スイス独立史、また建国史にはウィリアム・テルが欠かせないというのであれば、どちらでも可能だ。ただし、テルは架空の人物である。ということはテルが登場する作品はすべてが創作となる。

明治時代におけるスイス史関連の、ある歴史書から説明する。スイス史の概略とテルの関係をj知るために必要だ。

1 スイス史とウィリアム・テル

1900年代明治時代の日本人が、その認識テルが架空の人物であることを一部を除いてjるく共有していたようには見えない。

久松義典『万国史略』(集英堂1880.10.29)巻3に紹介されたスイス史を引用する(変体仮名は書きかえた)。短文だから全文を引用し注をつけながら読む。

瑞西史

瑞西ハ、日耳曼 法蘭西及ひ伊大利ノ間ニ在ル国ニシテ、地勢山谷多ク、風景ノ清奇ナルコト、欧羅巴中ニ冠タリト云フヘシ、国内ノ州ヲ分ツテ二十ニト為ス、

注：スイスの地理的位置を説明する。ドイツ、フランス、イタリアに囲まれ22州に分かれている。22州ということは1815年に成立した連邦国家を指しているのだらう。

其人民ハ、大半牧畜ヲ以テ業ト為シ、古代ニ於テハ、羅馬ニ属シ、又法蘭哥ニ従ヒ、其後日耳曼ノ統轄スル所ト為リ、以テ紀元千三百 七年代ニ至レリ、

注：スイスの歴史を過去にさかのぼって述べる。ローマ、フランク王国、ドイツに支配された。「千三百 七年代」と書く。「代」はないほうがわかりやすい。1307年といえばシラー戯曲「ウィリアム・テル」(英語読み。以下同じ)の年代設定と一致する。ウィリアム・テルがリンドを射抜いた年だ。

初メ日耳曼帝羅德福ノ政ヲ施スニ当リテハ、法ヲ制スルコト公平ニシテ、国人悦服シタリシカ、紀元千二百九十八年、垂爾伯勒第一立チテ帝ト為リ、私意ヲ以テ、苛政ヲ行ヒケレハ、官吏皆之ニ倣フテ、大ニ庶民ヲ虐使シタリ、

注：羅德福はルドルフ1世、その長子が垂爾伯勒第一アルブレヒト1世である。

其間却土勒ト云官吏ノ如キハ、最モ虐威ヲ逞フシ、己カ帽ヲ竿頭ニ懸ケ、国人ニ命シテ、之ヲ拝セシメタリ、時ニ維廉惕爾ト云モノアリ、肯テ之ヲ拝セサリシカハ、却土勒怒リテ、惕爾カ子ノ頭上ニ林

檣ヲ置キ、惕爾ヲシテ、之ヲ射セシメタ
レドモ、終ニ其子ヲ傷ツケス、

注：却士勒はゲスラー。本文ではゲス
レルと表記する。本稿はゲスラーを使用。
シラー戯曲に出てくる悪代官である。彼
も伝説上の人物。維廉惕爾はウィリア
ム・テル。著者久松は、リンゴを射落と
す場面をまるで史実であるかのように説
明した。

官吏ノ暴虐ナルコト、斯ノ如クナリシカ
ハ、国民之ニ服スルコト能ハス、惕爾ヲ
推シテ、長ト為シ、同志者相会シテ盟ヲ
立テ、日耳曼帝ハ、尚ホ奉戴スヘキモ、
官吏ハ、必ス之ヲ斥逐セント約シ、期日
ヲ定メテ、都城ヲ襲ヒ、諸官吏ヲ虜ニシ
テ、之ヲ放逐シ、其他ノ城塞モ、皆計テ
以テ之ヲ拔キ、一滴血ヲ流サスシテ、一
大变革ヲ成シ、是ヨリ一國ノ自由ヲ保チ
テ、人心全ク團結シ、千三百十五年ニ至
リテ、終ニ共和政府ヲ立ツルコトヲ得タ
リ、千五百三十四年ニ至リテ、維廉惕
爾ハ死シタレドモ、土人ハ尚之ヲ信セス、
其後五百年ニ至リテモ、其友二人ト共ニ、
路塞尼爾湖傍ノ洞穴ニ中安寝シ、国難ノ
際ニハ、三人皆忽チ甲ヲ撰キテ来リ、土
人ヲシテ、其自由ヲ保タシムヘシト伝ヘ
タリトソ、(後略)

注：テルはここではスイス独立運動の
主人公である。1315年はモルガルテンの
戦いがあった年だ。テルの死去を1534年
とするのは誤植だろう。「五」と「三」
は見誤りやすい。訂正して1334年ならば
許容範囲内だ。ただし、架空の人物だか
ら死去した年に諸説があるのは不思議で
はない。漢訳のひとつ『瑞士建国誌』で
は、1343年あるいは1334年にしている。
路塞尼爾湖はルッセン湖でルツェルン湖
の訛ったもの。

テルのリンゴ射的を盛り込んだ説明が、スイ
スの歴史のなかに堂々と収録されている。『万
国史略』という立派な書名の刊行物にある記述
だから、そのすべてが正史として認識されただ
ろう。日本に滞在していた中国人留学生がもし
これを読んだとすれば、テルが実在の人物であ
ることを疑わなかったのではないか。想像上の
人物だと知っていたかどうか。かなりあやしい。

この『万国史略』を材料のひとつに利用して
書かれたのが、谷口政徳(暁天逸史)纂訳『(血
涙万行)国民之元氣』前後編(金泉堂1888.1。
以下日本『元氣』と称する)だ。谷口には、谷
口流鶯名で多数の著作を刊行した。その中に
『(受験応用)万国小地誌』(博文館1891.2.1。国
立国会図書館デジタルコレクション)がある。
「瑞西」を概観してほぼ2頁でしかない。ウィ
リアム・テルへの言及はない。

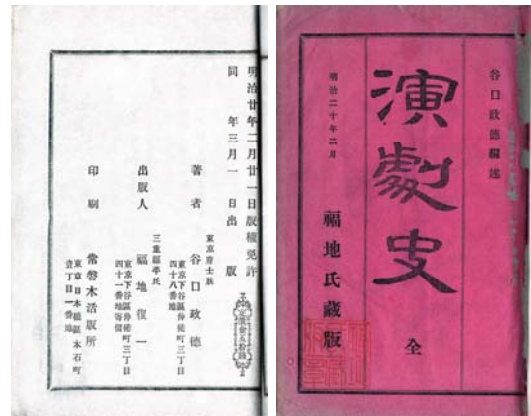


図1 奥付と扉

また、彼の編述で『演劇史』(博聞社、春陽
社1887.3.1)がある。内容は、日本演劇前史、
日本演劇本史、西洋演劇史に分かれる。西洋演
劇史では日耳曼に言及する。だが、そこでもシ
ラーという名前はなし。名前がないからといっ
て谷口がシラーを知らなかったことには、当然
ならない。日本『元氣』にウィリアム・テルが
登場するのは、別の書物を参照したのだろう。

2 『国民之元氣』のばあい

書名の『国民之元氣』だけを見て、それがスイス独立、あるいはウィリアム・テルが登場する書物だとは想像がつかない。それらを示唆する単語はどこにもないからだ。

表紙に「MADAME T^{ママ}BERESE」とある。BはHの誤記だろう。だが、マダム・テレーズは出てこない。意味不明な表示だ。「睨天逸史谷口政徳纂訳」の「纂訳」表示は翻訳だということか。



図2 奥付と表紙

前編9回、後編11回の全20回で構成される。回数番号はつけられていない。本稿で第 回とするのは仮の措置である。

「例言」に本書の成り立ちが説明してある。変体仮名は書き直して引用する(以下同じ)。

一本書は国民の元氣と題し瑞西独立の顛末を記述せしものなり而して書中の事実は概ね正史に據りて少く演義したるに過ぎざれば彼の空中に樓閣を構へし假作ものと全しからず(後略)

日本『元氣』はスイス独立を主題としている。そのことが、上の説明を読んでではじめて理解できる。シラーの名前がない。シラー戯曲とは無関係だと思はずだ。「正史」に基づいたと書いている。だが、具体的な書名をあげてはいな

い。たぶん上述『万国史略』を含んだ複数の歴史書を参考にしたのだろう。創作ではなく歴史であることを強調している。ただし、どうしても表紙の「纂訳」が頭の中に残る。

日本『元氣』には漢文で書かれた「瑞西独立小史」が冒頭に置かれる。

固有名詞のいくつかを対照して示す。カタカナは筆者が補った。『万国史略』日本『元氣』の順だ。

スイスを瑞西と共通して表記する。漢語では瑞士という。ルドルフ羅徳福 羅徳布。アルブレヒト1世亜爾伯勒第一 亜爾伯勒。ゲスラー 却士勒 却士勤。この2例の末尾をみると字形は似ているがもとの音が違う。日本『元氣』はもとの「勒」を「勤」と誤植しているのではないかと疑う(注; 日本語全文にわたっている)。もうひとりの悪代官ランデンベルクは『万国史略』にはないが、日本『元氣』では郎田山として出てくる。

同じく日本『元氣』には次が書かれている。牛2頭を奪われそうになったウンターヴァルデン翁徳瓦丁のメルヒタールに住むヘンリーホンメルキタル顕理渾麥爾希達とその息子アルノルト亜爾那脱がいる。ウェルナー・シュタウファッハー威児尼士^{ママ}陶弗法もいる。ここまできるとシラー「ウィリアム・テル」そのものだ。ウィリアム・テル維廉惕爾 維簾惕爾のリング事件が日本『元氣』にも書かれている。スイス独立史の転換点になったモルガルテン摩爾加典の戦いは1315年11月16日だと明記する。

こう見てくると日本『元氣』に置かれた漢文「瑞西独立小史」は、『万国史略』よりも説明がかなり詳しい。詳細になっている箇所はシラー「ウィリアム・テル」なのだ。ゲスラー、ウィリアム・テルらを登場させるところで該書のすべてが史実というわけではないことがわかる。著者の谷口は「彼の空中に樓閣を構へし假作ものと全しからず」と書いてはいる。だが、少なくとも漢文「瑞西独立小史」はその言葉通りで

はない。

しかも、表紙は「睨天逸史谷口政徳纂訳」だ。また、本文の署名は「睨天逸史纂訳補述」となっている。「訳」の1字は、底本があることを示しているように思う。

参考までに柳田泉*1から引用する。

「表紙に Madame Thèrese[Thérèse] などと記してあるので、例のシャトリアン(筆者注: エルクマンとシャトリアンの共同筆名)の同名の小説の訳でもあるかと思うと、全然これには縁のないもので、ウィルヘルム・テルを中心としたスイス独立史を小説化したものである」

柳田は、「ウィルヘルム・テルを中心としたもの」だと書いている。そうなのかと私は読み始めた。ところが、テルはなかなか登場しない。

まず大要をのべる(後に詳述)。

虐政を実行したのは悪代官ゲスレル(郇士勤。ゲスラーのこと)とランデンベルク(郎田山)のふたりだった。アルノルト(亜爾那脱)が追われて山中で道に迷いたどりついた家には16、7歳の少女がいた。誘拐されているのだ。

ここに挿し絵が1葉はさまれている。「少女信義ノ為メニ身ヲ猛獅ノ犠牲ニ供ス」と説明してライオンの背にまたがる少女が描かれる(図3)。



図3「少女信義ノ為メニ身ヲ猛獅ノ犠牲ニ供ス」

本文の内容とは結びつかない。実は、後ろの第6回で語られる物語に関連する挿絵である。昔、

猶太国のある商人が貿易のために旅に出ることになった。娘姉妹に土産は何がいいかと問えば、姉は珊瑚の首飾り、妹は子犬1匹を望んだ。それぞれを入手して帰途につく。日が暮れようとしているところにライオンが出現した。命乞いをして最愛の妹娘を与えると叫ぶ。命からがら帰宅したところでライオンが妹娘を要求しにきた。子犬を抱いた妹娘をライオンに泣く泣く渡す。妹娘を連れ帰ったライオンは、実は魔法にかけられた王子だった。犬がその魔法を破ったのだ。スイスの救助犬にからめた変身譚である。その挿絵がなぜ本来あるべき箇所からずっと離れた前のこの場所に挿入されているのか意味がわからない。単なる製本上の手違いか。どのみち史実とは関係なく自由に少女を創作した部分だ。

ウィリアム・テルが出てくるのは、ようやく前編26頁第3回になってからだ。「^{ワルトル}瓦爾徳が継子^{ワイルヘルムテル}維廉揚爾」とある。人名表記が統一されていない。後編5頁第10回では^{ふるこれん}「布爾古連の^{ワイルヘルム}維廉別爾」(6頁以降では「惕爾」)と表示される。リング事件が起こり(その挿絵はない)捕縛されたテルは危機を脱出して結局のところ悪代官ゲスラーを射殺した。次の第11回では山中で猪に襲われたが刀で刺しこれを退治する。これはあまり聞かない話だろう。

テルが登場するのは主として第3回、第10、11回だ。あとは第15回に少しの発言が記録され行動についての説明がある。名前だけ出てくるのが第17、18、19回だ。第20回には、テルが総軍の将となりモルガルテン(摩留牙典)でオーストリア軍を破る様子が比較的詳細に描かれている。スイス独立は、国民の元気にもとづき奮起したことが要因である。これが書名の由来だ。

以上の大要からわかるのは、テルは出てくるが物語の中心人物ではない。主なる何人かのうちのひとりにすぎない。柳田泉が説明した「ウィルヘルム・テルを中心とした」事実は存在しないのだった。意外に思ったことだ。

日本『元氣』はスイス独立史そのままを書いたものではない。年代、場所、人物などの基本的事項は歴史書によっているが、全体から見れば約3割から4割くらいだろう。それに加えて活劇場面と2組みの恋愛関係および兄妹物語(小さいころ誘拐された妹を捜す兄)をからめて構成した。それには前述の変身譚も含まれる。創作部分は約6割から7割というのが私の印象だ。谷口が独自に作りあげたものと思う。だが、その巧みであるところを見れば別に拠るところがあるような気もする。今のところどちらか不明である。

くり返す。ウィリアム・テルだけが登場するわけではない。つまり、スイス独立運動を背景にしてそれにウィリアム・テル伝説を組み込んだ冒険恋愛小説というのが妥当だと考える。

日本『元氣』について言及した文章を見ない。少し詳しく紹介した理由だ。

これを底本にして日本にいる中国人が漢訳した。印刷されて『(最新小説)瑞西独立警史』になった。

瑞西独立警史 (最新小説) ^{ママ} 18回

陸龍翔(一説に翔)訳

発行所: 日本・訳書彙編社、総售處: 上海・開明書店 光緒二十九年五月二十八日 (1903.6.23)

作品名の前半4文字がスイス独立という意味であることは問題ない。ただし、後ろの2文字「警史」はわかりにくい。現在、漢語の「警史」は「警察の歴史」という意味で使用されている。だが、それと100年以上も前に刊行された『警史』の書名とはつながらない。「警」に「知らせる、報じる」という意味がある。「警世」ならば、世人をいましめる、世人に知らせるだ。スイス独立について中国人に知らせたい歴史だと考える。今、「スイス独立警世史」だと理解しておく*2。

訳とあるだけで原作、原作者についての記述はない。

訳書彙編社は、留日中国人学生が日本東京において組織した。その刊行物『訳書彙編』1900年創刊は、彼らが刊行した早期の雑誌だ。主として政治・行政・法律・経済の翻訳を掲載した*3。

資料によれば刊行した訳書の一部につきのようなものがある。参考のために示す。

『波蘭衰亡戦史』第1冊 洪江保著 東京・訳書彙編社 明治34(1901)*4

羽化生洪江保『波蘭衰亡戦史』 博文館1895.7.18 万国戦史 第10編*5

『累卵東洋』乙羽生(大橋乙羽)著、憂亜子(大房元太郎)訳 訳書彙編社 光緒27.11(1901)

大橋乙羽『政治小説 累卵の東洋』東京堂1898.11

『比律賓志士独立伝』(表紙は「飛律賓志士独立伝」、目次、本文が「比律賓志士独立伝」)(日^{ママ})崇昭本西著、吳超



図4 影印本 奥付/表紙

3 『瑞西独立警史』のこと

本稿で紹介する『警史』は以下のとおり。

訳 訳書彙編社1902.10.10

崇昭本西を日本と記すのは阿英の誤り。
(比律賓) マリアーノ・ボンセMARIANO
PONCE著、宮本平九郎、藤田季莊共訳
『南洋之風雲：比律賓独立問題之真相』
博文館1901.2.23の「付録：志士列伝」を
漢訳する

『美国独立史』(美)姜寧氏著、章宗
元訳、章宗祥校訂 日本東京・訳書彙編
社1902.10.27 / 1903.2.7再版

原作不詳。OPEN LIBRARYに“A SHORT
AMERICAN COLONIAL HISTORY IN
CHINESE”名で収録。章宗元は、章宗祥
の兄。アメリカに留学したことのある法
律家、経済学者*6。

『外交通義』(日)長岡春一著、錢承
誌訳 訳書彙編社1902.9.25

長岡春一『外交通義』有斐閣書房1901.4.4

『訥耳遜伝』(英)羅培索叟著、訳書
彙編社輯訳 日本東京訳書彙編社1903
伝記叢書1

ROBERT SOUTHEY “THE LIFE OF
NELSON” 1813

各国の独立を記述した物が目につく。本稿と
の関連でそういう種類の書籍を抽出したからだ。

以上の刊行物のなかに『警史』を置けば、なる
ほど同じ傾向の作品だと納得がいく。いわゆる
政治歴史小説に属する。

中村忠行説

この『警史』の底本については、中村忠行が
触れている。割り注で次のように書く。

山田郁治訳『哲爾自由譚』^マ? / 光緒廿九
年、訳書彙編社刊*7

阿英目録は、156頁に『瑞西独立警史』を収
録している。それには底本についての言及はな

い。阿英目録の「翻訳之部」そのものが実物に
表示があるばあいを除いて原作、原作者をいっ
さい明記しない。明らかにしようという努力を
放棄している。中国の研究者で底本について説
明した人はひとりもいない。だからこそ中村の
注記が意味を持つ。

中村は書名の『瑞西独立警史』から連想して
山田『哲爾自由譚』をあげたのだろう。日本の
書籍が底本だと考えた根拠は、おそらく刊行し
たのが訳書彙編社だからだ。上述のように該社
は日本に留学していた中国人学生たちが設立
した組織だった。翻訳書の多くが日本語からの漢
訳である。それらの中の1種だと推測したのは
自然な流れだといえる。しかし、底本だと確認
することができなかった。中村が「?」をつけ
た理由ではなからうか。『警史』を見ることが
できなければしかたのない措置だった。それを
受けて「?」を保存したまま『清末民初小説目
録X2』(2016)には記述を増やして次のよう
に説明する。

視而列爾(シルレルSCHILLER)著、松
湖漁史(山田郁治)訳述『哲爾自由譚(一名
自由之魁)』(甘泉堂、丸善書店、泰山堂
1882.10(フリードリッヒ、ファン、シル
レル「ウィルヘルム、テル」スツットガ
ルト1869)か?

先行研究は尊重すべきだ。特に翻訳作品の原
作については不明なばあいが多い。研究の手が
かりになるならば、少しの言及でも目録に記録
する。それを調べるのは後の研究者の仕事だ。
中村の指摘通りならば、さらに対象を掘り下げ
て調べることができる。違っているならば、別
の方面からさらに追究して訂正すればよい。

シラー「ウィリアム・テル」であるという。
国立国会図書館デジタルコレクションで公開し
ている『哲爾自由譚』を読めば、前編のみであ
ることがわかった。後編は刊行されなかったよ

うだ。一方の『警史』は完結している。ゆえに『哲爾自由譚』は漢訳本の底本である可能性がなくなる。樽目録X2の「か？」は訂正して「ではない」にしなければならない。底本としたのは、前述のとおり日本『元氣』なのだ。

ふたつの序がついている。

栄驥生序

序の文末には「癸卯清和望日上海脂車栄驥生序於日本東京旅舎」とある。1903年、著者は東京に滞在中であったらしい。「旅舎」だから旅館だろう。ということは旅行であって留学ではなさそうだ。漢訳者の知人でなければ序は書かないだろう。

栄驥生が序で強調するのは、世界が競争状態にあり「優勝劣敗」という天演(=進化)の公理が働いていることだ。優れた者は、この数年間のフィリピン、南アフリカ、日本であって小国ながら自由独立の精神を回復させた。ところが、我が「支那」は深く長い眠りについたままだ。自由独立の精神を注入し我が民心を目覚めさせ奮起させるために本書をすすめる。

中国国民はスイス独立運動に学べ、というのが栄驥生の考えである。

なお、栄驥生は訳者について「雲間陸君龍翔」と書く。該書奥付の陸龍朔とは異なる。☞

【注】

- 1) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究 第5巻 春秋社1961.9.15 / 1966.3.10二刷。117頁
- 2) CHEN PINGYUAN(陳平原)著、VICTOR PETERSEN 訳、*THE DEVELOPMENT OF CHINESE MARTIAL ARTS FICTION - A HISTORY OF WUXIA LITERATURE* CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 2016 は138頁注5において *History of Swiss Independence* という訳語をあたえている。「警」は無視したらしい。
- 3) 丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版1985.9.30。275頁 / 史和、姚福申、

葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2。197-198頁

- 4) 楊蔭杭(1879-1945、日本早稲田大学留学、『訳書彙編』の創刊者のひとり)の編訳という。「楊絳家庭背景揭秘」がウェブサイト『万花鏡』に見える。2016.11.1確認
- 5) 藤元直樹「渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館」国会図書館『参考書誌研究』第60号 2004.3。山本勉「明治時代の著述者 渋江保の著述活動 出版物「万国戦史」を中心に」『仏教大学大学院紀要文学研究科篇』第43号 2015.3 電子版
- 6) 徐友春主編『民国人物大辞典』石家荘・河北人民出版社1991.5。864頁など
- 7) 中村忠行「晩清に於ける虚無党小説」『天理大学学报』第85輯 1973.3.21、149頁

清末小説から 第124号 2017.1.1

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 4完

- 「区別がつかない論」再び樽本照雄
- いくたびかの阿英目録15樽本照雄
- 新しい「説部叢書」研究神田一三
- 林訳『伊索寓言』の底本(下)
- 挿絵の謎を解く沢本郁馬

清末小説から 第123号 2016.10.1

林訳『伊索寓言』の底本(上)

- 挿絵の謎を解く沢本郁馬
- 女橋尻 罕見林譯研究資料古二徳
- 漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 3
- 「区別がつかない論」再び樽本照雄

清末小説から 第122号 2016.7.1

- いくたびかの阿英目録14樽本照雄
- 漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 2
- 「区別がつかない論」再び樽本照雄
- 漢訳『奇獄』の謎 4完 結論検証篇(下)沢本香子
- 也説林訳伊索寓言的原本何在蘇建新
- 孫毓修『伊索寓言演義』の底本沢本郁馬
- 論商務印書館対林訳小説的重要作用江曙
- 中国のシェイクスピア最新成果樽本照雄

晚清民国时期《金银岛》汉译本考述

付 建舟

《金银岛》的原著者是Robert Louis Stevenson (1859-1894), 今译为罗伯特·路易斯·史蒂文森。原书名为 *Treasure Island*。这部作品在晚清民国时期有多种汉译本, 在中国影响很广, 可谓家喻户晓。然而, 其汉译本至今没有得到全面而系统的考述, 有必要略作考述。

一、商务印书馆编译所译述本

《金银岛》有多种汉译本。就笔者所知, 其最早的汉译本是上海商务印书馆编译所译述本(以下简称“商务汉译本”)。这一汉译本有多种版次, 首版时间是光绪三十年(1904)九月。一册, 94页, 定价每本大洋二角。版权页署“原著者 英国司的反生”、“翻译者 商务印书馆编译所”、“发行者 商务印书馆”、“印刷所 商务印书馆”、“总发行所 商务印书馆”。其封面、扉页与版权页分别如下图。



扉页题《说部丛书第一集第八编》字样, 而封面无此字样, 这不符合商务版《说部丛书》封面与扉页题字的惯例。其解释有三: 一是笔者所见的电子图书有误, 可能是在制作电子图书时封面产生张冠李戴的现象; 二是若电子图书无误, 可能是实物图书在原装时封面产生张冠李戴的现象; 三是若实物图书无误, 可能首版封面、扉页和版权页就是如此。根据我们对商务版《说部丛书》的认识, 首版本属于商务版《说部丛书》十集系列, 即该丛书共十集, 每集十编。此外, 商务版《说部丛书》还有四集系列, 即共四集, 前三集每集一百编, 第四集二十二编。初集(即第一集)的一百编除两编外, 其余九十八编出自《说部丛书》十集系列。

值得注意的是, 扉页题《说部丛书第一集第八编》字样的还有《吟边燕语》, 也属于商务版《说部丛书》十集系列。《吟边燕语》, 英国散文家查理士·兰姆和他的姐姐玛丽·兰姆根据莎士比亚戏剧故事改编的短篇小说集, 林纾、魏易译述, 上海商务印书馆出版发行。根据樽本照雄所编《清末民初小说目录X》(清末小说研究会2015)第5177-5184页可知, 《吟边燕语》被编入四种“小说丛书”系列, 即其一为《说部丛书》十集系列第一集第八编, 其二为《说部丛书》四集系列初编第八编, 其三为《林译小说丛书》第一集第一编, 其四为《小本小说》系列之一。

十集系列再版本, 署光绪三十年(1904)一月首版, 光绪三十一年(1905)三月再版。发行者、印刷所与总发行所均为中国商务印书馆。一册, 156页, 每部定价洋三角五分。

四集系列版本, 甲辰(1904)十月初版, 光绪三十一年(1905)三月再版, 光绪三十二年(1906)四月三版, 中华民国二年(1913)六月四版, 中华民国三年(1914)四月再版。发行者、印刷所、总发行所均为商务印书馆, 分售处为

全国各地乃至海外的商务印书馆，凡27处。一册，156页，每部定价洋三角五分。

《林译小说丛书》版本，中华民国三年（1914）六月出版。上海商务印书馆1931年5月九版，1934年九月国难后一版，1935年4月国难后二版。

“小本小说”初版本，署“原著者 英国莎士比亚”，中华民国三年（1914）二月初版。发行者、印刷所与总发行所均为中国商务印书馆，外埠分售处有商务印书馆分馆二十八家。一册，153页，每册定价大洋壹角伍分。六版本，版权页署中华民国三年五月初版（“五月”有误，初版本署“二月”），中华民国十二年（1923）七月六版，外埠分售处有商务印书馆分馆四十五家，比初版时增加十七家。一册，153页，每册定价大洋壹角伍分。

四者内容相同，内收《肉券》、《驯悍》、《李误》、《铸情》、《仇金》、《神合》、《医徵》、《医谐》、《狱配》、《鬼诏》、《环证》、《女变》、《林集》、《礼哄》、《仙狻》、《珠还》、《黑瞽》、《婚诡》、《情感》、《飓风》，凡20篇。

《吟边燕语》原著者英文名为Charles Lamb（1775-1834）；Mary Lamb（1764-1847），即兰姆姊弟。原著英文名为*Tales from Shakespeare*（1807）。

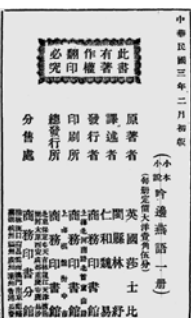
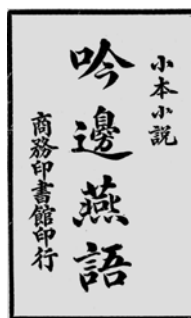
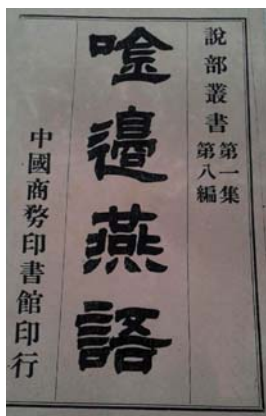
渐即颓运。而吾国少年强济之士，遂一力求新，丑诋其故老，放弃其前载，惟新之从。余谓从之诚是也，顾必谓西人之夙行夙言，悉新于中国者，则亦誉人增其义，毁人益其恶耳。英文家之哈葛得，诗家之莎士比，非文明大国英特之士耶？顾吾尝译哈氏之书矣，禁蛇役鬼，累累而见。莎氏之诗，直抗吾国之杜甫，乃立义遣词，往往托象于神怪。西人而果文明，则宜焚弃禁绝，不令滢世知识。然证以吾之所闻，彼中名辈，耽莎氏之诗者，家弦户诵，而又不已，则付之梨园，用为院本。士女联袂而听，歔歔感涕，竟无一斥为思想之旧，而怒其好言神怪者，又何以故？……嗟夫！英人固以新为政者也，而不废莎氏之诗。余今译《莎诗纪事》，或不为吾国新学家之所屏乎？《莎诗纪事》传本至多，互校颇有同异，且有去取，此本所收，仅二十则，余一一制为新名，以标其目。”

书中还有汪笑依撰写的“题英国诗人《吟边燕语》廿首”，前三者为：

肉券一：不知流血原无价，犹太安能免灭亡！未许先生割肉去，慢云条约误东方。

驯悍二：凡百季常应愧死，司晨何待牝鸡鸣。降魔不恃金刚杵，好仗雄狮吼数声。

李误三：几回错认作家公，面貌相同心不同。倘遇孪生双姊妹，二难四美难通融。

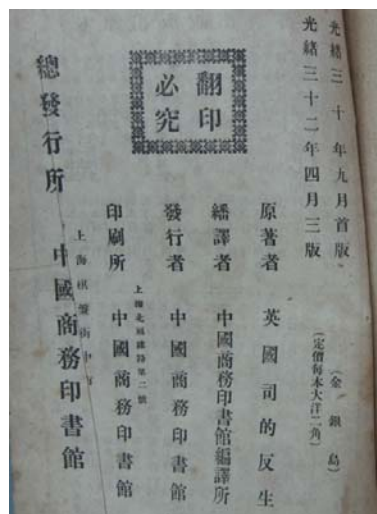


商务汉译本的第二版本或者说再版本，笔者未见。

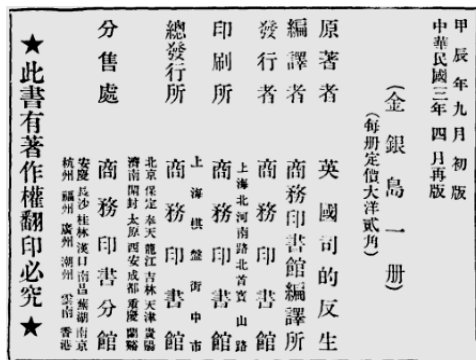
商务汉译本的第三版本，时间为光绪三十二年（1906）四月。其版权页信息与“首版”基本相同。樽本照雄先生的《清末民初小説目録X》

卷首有林紓于光绪光緒三十年(1904)撰写的序，其中云：“欧人之倾我国也，必曰：识见局，思想旧，泥古骇今，好言神怪，因之日就沦弱，

(清末小説研究会2015, 以下簡稱《樽氏目錄》)第1984頁關於《金銀島》記載:“中國商務印書館1904.9, 說部叢書二=1”, 還記載“[民外0831] 1904.9初版、說部叢書第2集第1編”。這裏的“說部叢書”是指十集系列。這一版本筆者未見, 但與筆者所見的兩種版次相抵牾, 並且這一記載把筆者所見的兩種版次的版權信息攪混了。筆者所見的“1904.9”出版的署“首版”, 不是署“初版”, 雖然二者意思一樣, 但文字不一樣, 不能等同。筆者所見的十集系列第2集第1編的出版時間署“光緒三十二年四月”, 即1906年5月。《樽氏目錄》同頁關於《金銀島》還記載:“中國商務印書館1906.4三版 說部叢書二=1”。這一版本就是筆者所見的第三版本, 其封面、扉頁與版權頁分別如下圖。



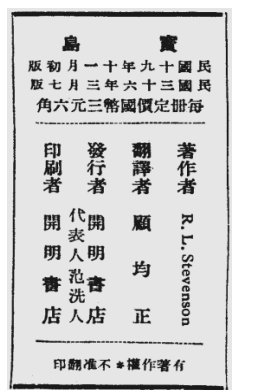
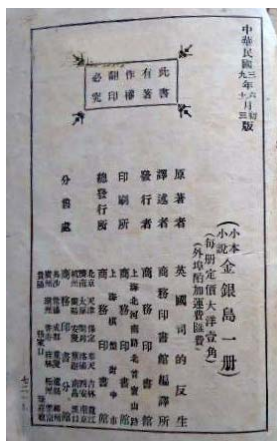
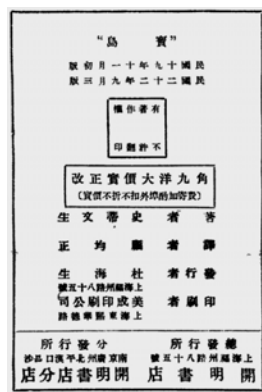
《說部叢書》四集系列初集第十一編版本, 封面題“冒險小説”, 上海商務印書館甲辰(1904)九月初版, 中華民國三年四月再版。全書一冊, 85頁, 每冊定價大洋貳角。與前者不同的是, 從1904年到1914年, 商務印書館在全國各地乃至海外已經建立起自己的營業網絡, 版權頁上增加了商務印書館的分售處, 具體為: 北京、保定、奉天、龍江、吉林、天津、貴陽、濟南、開封、太原、西安、成都、重慶、蘭溪、安慶、長沙、桂林、漢口、南昌、蕪湖、南京、杭州、福州、廣州、潮州、雲南、香港等。



《金銀島》, 上海商務印書館“小本小説”之一, 版權頁署中華民國三年六月初版, 中華民國九年十一月三版。全一冊, 83頁。每冊定價大洋壹角(外部酌加運費匯費)。

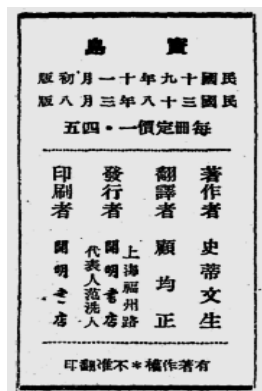
全書無序跋。正文前有廣告“林琴南先生譯言情小説”, 凡八種, 即《迦茵小傳》二冊一元、

《玉雪流(留)痕》一册四角半、《洪罕女郎传》二册七角、《红礁画桨录》二册八角、《西奴林娜小传》一册二角半、《剑底鸳鸯》二册七角半、《玳司刺虎记》二册六角半、《西利亚郡主别传》二册五角半。正文后有广告“商务印书馆印行有益小说”，凡六种，即《苦儿流浪记》三册八角、《馨儿就学记》一册三角半、《埋石弃石记》一册二角半、《孤雏感遇记》一册二角半、《美洲童子万里寻亲记》一册三角、《双孝子喋血酬恩记》二册五角半。



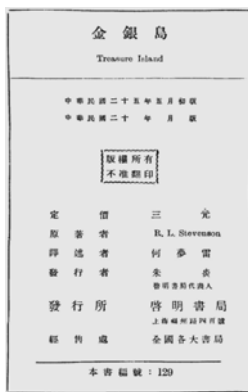
二、顾均正汉译本

顾均正汉译本，译名为《宝岛》。上海开明书店1930年11月初版，1933年9月三版。初版未见，第三版为《世界少年文学丛刊：小说3》，正文350页，附页28页。书中有三幅图片，史蒂文森像、史蒂文森分坟墓、史蒂文森墓碑。另外还有十三幅插图。卷首有译者的《付印题记》、徐调孚的《史蒂文生小传》及《史蒂文生重要作品》。全书凡六部三十四章，有部章目录。章目从略，部目依次为：老海盗、船上厨夫、我的海岸冒险、木寨、我的海上冒险、雪儿福船长。卷首有《小引》，对作者略作介绍。1947年3月七版，1948年3月八版，二者内容与第三版相同。



三、何梦雷汉译本

何梦雷译述本，译名也为《金银岛》。《世界文学名著》丛书之一，上海启明书局1936年5月初版，1947年9月三版。162页，实价二元。全书凡六章三十四节，有章节目录。节目从略，章目依次为：老海盗、海上厨子、我在岸上的冒险、木篱防地、我在海上的险遭、锡儿浮船长。卷首有《小引》，对作者略作介绍。



小艇、第二十三章 风和潮、第二十四章 小艇的厄运、第二十五章 卸下海盗旗、第二十六章 意思雷儿·韩兹、第二十七章“西班牙银元”、第二十八章 在敌营中、第二十九章 第二次的黑牒、第三十章 被囚、第三十一章 探宝：傅灵德的指针、第三十二章 探宝：林中怪声、第三十三章 盗首之死、第三十四章 结局。



四、黄海鹤汉译本

黄海鹤汉译本，译名也为《金银岛》，不过扉页误印为《金银鸟》。张梦麟主编《世界少年文学丛书》之一，昆明中华书局，1940年8月初版，254页。全书三十四章，有章目，无序跋。章目分别为：第一章“斑豹”旅馆里的老海盗、第二章 乌狗的来踪去迹、第三章 黑牒、第四章 航行衣箱、第五章 瞎子之死、第六章 船长的文件、第七章 行抵白利斯托、第八章 在“望远镜”旅馆中、第九章 弹药和枪械、第十章 海中经历、第十一章 苹果桶外的秘密、第十二章 作战计划、第十三章 登岸的经过、第十四章 战机的爆发、第十五章 岛人、第十六章 离船的情形——医生代述、第十七章 小艇的最后航行——医生代述、第十八章 第一天战斗的结果——医生代述、第十九章 在木寨中、第二十章 雪佛的使命、第二十一章 袭击、第二十二章 班根的



五、奚识之译注本

奚识之译注本，1949年6月由三民图书公司出版。该译注本卷首有《史蒂文生小传》，该小传云，史蒂文森出生于英格兰的爱丁堡，是十九世纪后半期的大小小说家，大诗人，新浪漫主义的杰出代表。其祖父与父亲都是有名的灯塔工程师，母亲是举止优雅的女子。史蒂文森的体格虽然不强壮，但读中学时特别用功，意志坚强。后来为

了健康起见，他游历英国伦敦、法国、意大利、瑞士、德国。他学过土木工程、法律，并正式从事过法律行业。但他从小就酷爱文学，1878年，他出版了第一本书《内地旅行记》，随后又出版了《沃尔特·斯科特爵士》、《骑驴漫游记》、《人与书散论》。1880年代，他先后出版了《少男少女》（1881年）、短篇小说集《新天方夜谭》（1882年）、《金银岛》（1883）、《化身博士》（1886）等。其中《金银岛》是他一生最著名最畅销的作品。

该注译本有两大特点，一是英汉对照，二是为英文生字加注。《史蒂文生小传》后的《华英对照的意义——写给教师学生及自修者》说，当时“华英对照”的英语读本比较流行，学生的进步也快。采用英汉对照并加注的方式，是为了教师更好地教，学生或自修者更好地学。

者不详。共分六编三十四章，有编目与章目，措词与顾均正汉译本和何梦雷汉译本十分接近。

作为世界文学名著，《金银岛》在中国的影响甚大，时间甚久，成为数代中国读者喜爱的文学杰作。该作的影响，从最初冒险精神的提倡，到后来借助于这一文学名著学习英语，反映了近现代中国社会的巨大变迁。 罍

（作者付建舟，浙江师范大学人文学院研究员）



此外，还有丁留馥汉译本与董芝汉译本，前者译名也为《金银岛》。上下两册，《世界少年文库》之三十三，上海世界书局1933年3月初版，包括插图共410页。卷首有《序论》。后者译名为《宝岛》。《世界文学名著丛书》之一，上海晓光书局，初版时间不详，1940年3月再版，199页。卷首有林荫序，作序时间为1939年3月。

值得注意的是，上海育才书局印行的《金银岛》与《宝岛》一样，卷首也有林荫序，作序时间为1939年3月29日，全书也是199页。封面题“世界名著 文学丛书”字样，未见版权页。译

林紓著、夏曉虹、包立民編注『林紓家書』

北京・商務印書館2016.5 碎金文叢

（『林紓家書』）小引夏曉虹
畏廬老人訓子遺書林實馨
後人心目中的林紓林大文
閱讀林紓訓子書札記夏曉虹
林紓的家教包立民

商務版「説部叢書」試行本

神田 一三

前稿「新しい「説部叢書」研究」(『清末小説から』第124号 2017.1.1)で触れた「説部叢書」試行本について補足する。

その存在は鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』(復旦大学2013 博士論文。[方曉博])で知った。

鄭方曉論文に掲げられたのは、白黒で小さくはっきりしない書影だった。それよりも鮮明な画像を孔夫子旧書網で見つけたので別に掲げる。

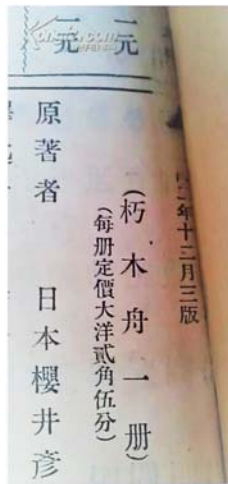
私は、それらを元版の延長上にある試行本と呼んでいる。

その理由は、表紙が元版と同じタンポポ文様であること。「第一集」と称していること。編番号は「第一一編」から始まっていることなどだ。初集がリボン文様の表紙に取りかえたのは、基本的に異なる。試行本だと私という理由だ。

試行本は、現在見ることのできる版本によれば、1913年12月から1914年にかけて刊行された。初集100編の刊行と併存する。ただし、初集本は1913年5月刊行のものがあるから、こちらの方が時間的には試行本に先行する。

現在判明している「説部叢書」試行本を次にまとめておく。注には元版から初集に移行したときの集編番号を示した。





第一集第一一編 金銀島 (冒險小説)
[方曉博50] 中華民國三年(1914)四月再版

注：第二集第一編 初集第11編

第一集第一二編 回頭看
[方曉博48] 乙巳年二月初版 / 中華民國二年(1913)十二月再版

注：第二集第二編 初集第12編

第一集第十三編 迦茵小伝
[方曉博51] 奥付なし

注：第二集第三編 初集第13編

第一集第一七編 / 第十七編 埃及金塔剖尸記

孔夫子旧書網に写真あり。角書なし、

中華民國二年十二月再版

注：第二集第七編 初集第17編

第一集第三五編 洪罕女郎伝

孔夫子旧書網に写真あり。角書なし、丙午年正月初版 / 中華民國二年十二月三版

注：第四集第四編 初集第35編。初集で魯濱孫飄流続記を前に移動させたので編数がひとつずれた

第一集八十編 朽木舟

孔夫子旧書網に写真あり。角書なし、 / 中華民國二年十二月三版

注：第八集第十編 初集第80編

従来の元版タンポボ文様は多色刷りだ。ひとつの書籍(写真参照)をみると、赤色で「説部叢書」「商務印書館訳印」と印字し、題名と原作者名は緑色、タンポボは藍色だ。タンポボ文様で統一してはいるが、その色使いは各本によって異なる。それを特色のひとつとしていた。

しかし、試行本の表紙は同じタンポボ文様とはいえ臙脂色で統一されている。見た印象からいえば地味な装丁だ。

それにしても、この試行本の存在が知られていなかったのはどういう理由からだろう。

ひとつ考えられるのは、やはり試行本としての役割しかなかったことだ。

商務版「説部叢書」といえば、元版よりもリボン文様の初集本が普通に思い浮かぶ。商務印書館自身が自社史の挿絵に掲げるくらい有名だ。出版部数が多かった。その証拠に孔夫子旧書網でも多数の、というよりも圧倒的にリボン文様が掲載されている。だが、試行本は文字通り試行のために刊行された。当時の読者の反応をさぐっていたのだろう。印刷部数が少なかったように思う。

試行本は、元版の第二集から第十集までを「第一集」で統一した。編番号を「第一」などと表示して新しさを表明したつもりだろう。しかし、表紙が元版のタンポボ文様を継承しているところが、初集本のリボン文様とは大きく違っている。

商務印書館が日本の金港堂と合併を解消したことを刊行物の表紙で明示する。その意図を実現するためには、元版と同じタンポボ文様では不十分だと考えられたとしても不思議ではない。日本から独立して生まれ変わったことを表明するためには、「初集」という呼称と表紙のリボン文様が必要だった。そうまでしなくてはならないくらい商務印書館にとって「説部叢書」は読者に歓迎された看板シリーズだったことがわかる。

罫

瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の嘘

樽本照雄

林紘は戯曲を小説体に変えて翻訳した。これが従来からあった林訳批判の主要な根拠だ。林紘は戯曲と小説の区別をつけることができない(「区別がつかない論」)。それほど無知だといって痛罵され続けた。劉半農と錢玄同が開始し、胡適が追認し、鄭振鐸が決定づけ、阿英が強調した。中国の学界はその見解を公式に維持し続けている。中国現代文学史の諸版を見ればそれが納得できる。

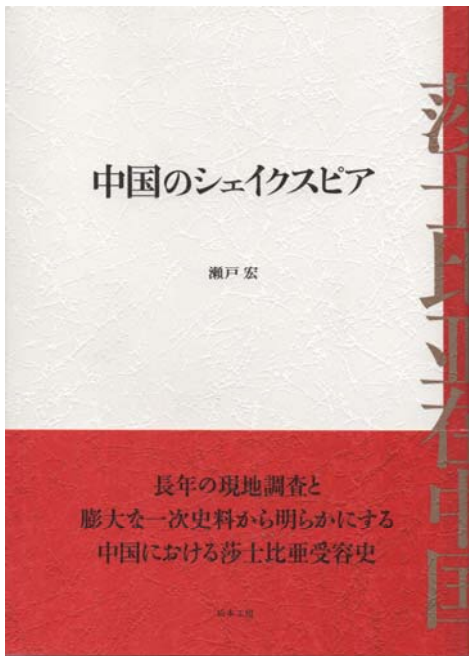
しかし、林訳の底本はシェイクスピア戯曲ではない。戯曲を小説に書き直したラム姉弟、クイラー＝クーチの著作なのだ。イプセンの戯曲はドレイコット・M・デルが小説化している。小説を漢訳して小説になるのは当然である。戯曲を小説体に変えて翻訳した、と林紘を批判する根拠が崩壊する。なによりも、林紘の文章を読めば彼自身が戯曲と小説をはっきりと区別していることがわかる。

林紘はやってもいけないことをやったと批判されてきた。明らかに冤罪である。21世紀のはじめまで長期間にわたって濡れ衣を着せられてきたというのが歴史的事実だ。

しかし、瀬戸博士はどうしても林紘を批判攻撃し、一方の劉錢胡鄭阿らを擁護支持したいらしい。そこで「シェイクスピア作品ではないも

のをシェイクスピア作品として紹介した」と語句をつくり、林紘がまるで詐欺を働いたかのように説明した。それを理由にして林紘批判を継続している。

無実の罪を着せられた被害者林紘が、瀬戸博士によって劉銭胡鄭阿らを誤解錯覚させた「詐欺師」になる。被害者が反対の加害者に認定される。それは、林紘を批判した劉銭胡鄭阿らが加害者から被害者に成りすますことを意味する。被害者へ「昇格」するらしい。被害者であればどのように林紘を批判し罵っても許されるというのが瀬戸博士の理屈だ。



瀬戸宏『中国のシェイクスピア』(2016)*1において瀬戸博士が展開した林紘批判について3点を指摘する。

シェイクスピア原作である

なによりも注目すべきことがある。林紘、魏易共訳『英国詩人吟辺燕語』(1904)に掲げられた林「序」だ。その「序」を読めば、シェイクスピア作品が戯曲であることを林紘は明確に理解している。彼は、戯曲と小説を厳密に区別

して語句を書き分けている。「区別がつかない論」はもともと成立しない。林紘は底本の小説を小説として漢訳しただけだ。

「区別がつかない論」を主張する人は、林「序」を真摯に読んでいないといわざるをえない。文学革命派に反対した保守派の代表者だと林紘のことを最初から色眼鏡で見ているから誤読する。私の知る限り、劉銭胡鄭阿らはもとより、後の中国、香港、台湾、欧米、日本の研究者で林「序」をあるがまま正確に読んだ人はいない。林紘は戯曲と小説の区別をつけていないとする結論が先にある。先入観(色眼鏡)をもって林「序」を読むから林紘が書いたことを理解することができない。阿英も「区別がつかない論」を林「序」に当てはめたから誤読した。そうなるのは必然だった。劉銭胡鄭阿らの主張が現在でも中国学界の主流なのだ。大多数の研究者がそれに追従している。例外がないことに私は驚いた。

瀬戸博士はそういう人たちの中のひとりだ。中国学界で公認されている既成の結論にはじめから追従しているから林紘「序」を読んだが理解することができなかった。自分の立論に不都合な記述は曲解した。林紘は戯曲と小説の区別がつかないという「区別がつかない論」を堅持した。それを基礎にしてすべてを解釈した。新しく「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と言いかえてそれをくりかえし書いている。

関連する箇所を引用する。

林紘は、シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介したのである。96頁

シェイクスピア、イプセン作品ではなくなったものをシェイクスピア、イプセン作品として紹介した林紘 97頁

戯曲を小説化したもの、すなわちシェイクスピア作品ではなくなったものをシ

エイクスピア作品そのものとして翻訳紹介した事実は変わらない。101頁

同時に林紘がシェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として翻訳紹介したのも事実であり 107頁

瀬戸博士が上のように主張する根拠はひとつだけだ。以下のとおり(下線は筆者)。

林紘は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず、依拠した底本の著者を記さず、これが鄭振鐸らの誤解、錯覚を引き起こす直接の原因となった。106頁

「林紘は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず」という見解を林紘がラム姉弟、クイラー=クーチ、デルの名前を出さなかった点に直結させた。「区別がつかない」から底本著者の名前を出さなかった。その逆も成立するというのが瀬戸博士の理屈だ。

何度もいうが、『英国詩人吟辺燕語』の「序」において林紘は戯曲と小説を区別している。それが事実だ。瀬戸博士は林「序」の日本語訳を提示した。読んだことはわかる。しかし、内容は理解できなかった。あるいは、自説に不都合な部分は無視した。

私は日本現代中国学会2008年度関西部会文学分科会において林「序」のなかの語句複数を具体的に示し、その内容を説明するよう瀬戸博士に対して直接要求したことがある。林紘は区別がつかなかったのか否か、それを判断するための重要語句である。瀬戸博士はあいまいな回答に終始した。多数の参加者が目撃している。私がおもその場で林紘が区別をつけていたと解答を示したにもかかわらず、瀬戸博士の文章にはそれが反映されていない。あいかわらずあいまいな訳語をつけたまま平気である。平気というよりもわざとそうしているのだろう。林紘が戯曲と小説の区別がつかないというために意図的にあ

いまいにしていると思われる。「自説に不都合な部分は無視した」「あるいは自分に不都合な記述は曲解した」という理由だ。

ラム姉弟の名前を出さないことは、批判の根拠にはならない。ましてや「区別がつかない」の論拠にもならない。ほとんど同時に刊行されたもうひとつの漢訳シェイクスピア物語がそれを証明している。

『海外奇譚』の訳者(名前不記)は、「^{ママ}海外奇譚叙例」において原書が「詩体」でありラム(蘭ト)が散文に書き直したと明記している。しかし、表紙には「英国索士比亞著」と示してシェイクスピアのみを掲げるのだ。



『海外奇譚』影印本

清末民初時期の翻訳には原作者名を示さないことが多かった。漢訳者の名前すらないものが存在する。原作も不明な作品はいくらでもある。それが当時の翻訳界の実状である。研究者ならば誰でも知っている常識といってい

いい。原作、原作者、訳者のすべてを明示すべきだというのが現在の常識であれば、それをもって過去を裁断するのは誤りだ。ラム姉弟の名前を出さずシェイクスピアだけを押し出すのは、当時の常識でいえば別に珍しいことでもない。ラ

ム姉弟の名前がないから「林紓は戯曲と小説の本質的な違いが理解できず」と瀬戸博士は短絡する。文学史についての知識がないことを自分から進んで白状してどうするのか。

林紓が「序」において戯曲と小説を区別している事実を無視する。事実にもとづかない妄想を瀬戸博士は書き連ねているだけだ。そればかりか、林紓のことを指して鄭振鐸らを誤解錯覚させた(はっきり書けば、騙した)「詐欺師」だと認定する。林紓を加害者に仕立て上げた。事実に基づかない瀬戸博士の書き方は悪質である。

瀬戸博士の主張する「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」は、その内容を詰めていくとおかしなことになる。

林訳の底本はもともと小説なのである。ゆえに、戯曲を小説にしたという従来の批判が成立しないことは瀬戸博士にも理解できたらしい。奇妙なのは、その上で林紓は戯曲と小説の区別ができないと従来どおりの主張をくり返すところだ。底本の著者名を出さなかったことだけを根拠にした。林紓が戯曲と小説の区別ができないからラム姉弟とクイラー＝クーチの作品をシェイクスピア作品として紹介した、という。瀬戸博士はいかにも林紓が「詐欺」をはたらいたという印象をあたえるように表現だけを創出した。新しい資料はなにも提出せず、既存の資料をこねくりまわしそういう風に言いかえるのが瀬戸博士の行なっている研究であるらしい。言葉をもてあそぶだけ。林訳批判という結論が先にあって(色眼鏡)、すべてそれにあわせて立論するのが現代中国学界では普通のやり方だ。そういうところも瀬戸博士は追従している。

「シェイクスピア作品ではない」というのであれば、シェイクスピアと同時代のベン・ジョンソンの作品とかだと思うだろう。他人の作品をシェイクスピア作品だといって紹介したのであれば林紓を「詐欺師」だといってもいい。ま

た、シェイクスピア作品に基づかないラム姉弟、クイラー＝クーチの別作品をシェイクスピア作品として紹介したのなら「詐欺師」でもかまわない。念のためにいえば、瀬戸博士は「詐欺師」という単語は使用していない。わざわざ「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」ともってまわったいい方をする。その意図は「詐欺」という単語を使用せず「詐欺」を想起させようとするところにある。自分はその単語は使っていないと言い逃れるつもりだ。

シェイクスピア戯曲に基づいて小説に書き換えたラム姉弟、クイラー＝クーチの作品は、「シェイクスピア作品ではないもの」のだそう。ここに言葉のごまかしがある。

ラム姉弟、クイラー＝クーチのシェイクスピアものは、シェイクスピア作品そのままではないことは当然だ。小説に書き換えたのだから。しかし、シェイクスピア作品から完全に独立した別物であるかのように説明するのは正しくない。もともとシェイクスピア作品だからこそ書名にシェイクスピアを使用している。シェイクスピア原作であることには違いはないのだ。それを「シェイクスピア作品ではないもの」と書いてシェイクスピアとは無関係でまったくの別物のように印象づけようとしている。悪意のある書き方だと私は考える。近松門左衛門作品(96頁)についても同様だ。

シェイクスピア作品は小説に書き直しても、シェイクスピア原作であることは揺るがない。シェイクスピアの名前と切り離しては存在しえないのだ。

二重基準である

瀬戸博士は、林訳シェイクスピアについて「詐欺」を匂わせて批判する。しかし、その林訳『吟辺燕語』にもとづいて勝手に台詞を創作した文明戯に対しては、紹介はするが問題視はまったくしない。

瀬戸博士の文章を引用する。

文明戯『肉券』はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亚所著」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている 77頁*2

「自覚をもっている」どころではない。当時の書籍に莎士比亚と明記している。時期的にいえば林紘批判が始められる前である。

范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』(1914 / 2015)*3の「《肉券》本事」から引用する。翻訳するまでもない。

是劇出自英国文豪莎士比亚所著，林琴南及白華所訳之《吟辺燕語》…… 41頁

林訳の共訳者は魏易だ。なぜか白華と誤記している。ここにラム姉弟の名前はない。シェイクスピア(莎士比亚)だけだ。

もうひとつ、鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』(1919 / 2016)*4の346頁「西洋新劇」にも「肉券 莎士比亚名著 冥飛」とある。ここにもラム姉弟の名前はない。『英国詩人吟辺燕語』にもとづいた文明戯全篇は、莎士比亚だけを掲げている。

シェイクスピア戯曲をラム姉弟が小説化した。その小説を底本にして林紘たちが漢訳する。その漢訳にもとづいて勝手に脚本をつくったのが文明戯「肉券」である。

瀬戸博士は次のように説明する。

(文明戯「肉券」の)脚色者がシェイクスピア『ヴェニスの商人』を知らず、観客もまた同様であったことは間違いな
い。78-79頁

結局、文明戯『肉券』は、端的に言えば、あらずじと人名はシェイクスピアから借りているが、内容は実質的に中国の

劇なのである。80頁

実際には、文明戯劇団は『吟辺燕語』諸編を上演する際、脚色という作業を経なければならなかった。そして上演舞台は、第一章でみたようにシェイクスピアの元の作品とは大きく異なったものとなったのである。96頁

文明戯「肉券」は、ラム姉弟の名前を提示していない。林訳にもとづき自由に脚本をつくった。シェイクスピア戯曲とは直接の関係がない。それをシェイクスピア作だと書籍に記述している。

包天笑が林紘の「肉券」を改編して「女律師」(1911)を作った。瀬戸博士はそれを以下のように説明する。「林訳『肉券』に基づき包天笑が脚色したものであることがわかるが、包天笑『女律師』は『ヴェニスの商人』の忠実な圧縮ではない」(74頁)

包天笑も莎士比亚著とだけ記す。これが実際に上海で上演された時、1914年7月15日付『申報』に「《女律師》為莎士比亚名劇」だと広告している*5。

瀬戸博士説にしたがえば、これらこそ「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と痛罵すべき箇所だ。文明戯の関係者も「詐欺師」に認定しなければ主張の一貫性を保つことができない。しかし、瀬戸博士は、林紘は批判しても文明戯については知らぬ顔を決め込む。これはまぎれもなく研究における評価の二重基準である。自分を研究者だと考えるのであれば二重基準の採用は致命的な欠陥だ。

責任問題

研究者の責任問題について瀬戸博士は「本論文発表も、筆者なりの責任の取り方の一端である」(107頁)と書く。「責任の取り方」とあるくらいだから林紘に濡れ衣を着せた責任を感じ

ているのかと思う。

瀬戸博士は、クイラー＝クーチ本、デル本が林訳の底本であることを知らなかった。演劇に関する事柄であるにもかかわらず、「中国現代文学演劇研究の末席に連なっている」(317頁) 瀬戸博士がなぜ自分の手でそれらを明らかにできなかったのか。あるいは、林紓批判について中国学界で認められた定説に疑問も持たず追従してきたのは正しかったのか。そう自らの不明を恥じてこれまでの事的研究姿勢を反省し外に向かって表明するのが一般的で常識的な「責任の取り方」ではなかろうか。ところが、瀬戸博士は違う。彼は責任を取らないし反省もしない。自分が誤解錯覚したのは林紓に原因があるからだと考えた。自らの無知を棚にあげ林紓に責任を転嫁し、瀬戸博士は被害者に成りすました。悪いのは他人ということにした。それをそのまま過去の劉銭胡鄭阿に向けて投影した。どこが「筆者なりの責任の取り方」なのか。論理的な整合性が皆無だ。不可解で不思議な思考法だといわなくてはならない。

瀬戸博士は、事実にもとづかず根拠もなく従来よりも一層激しく林紓を批判した。これが瀬戸博士の「筆者なりの責任の取り方」だそうだ。「責任の取り方」の意味が普通とは正反対である。常識をこえている。奇妙なことこのうえない。

私はすでに指摘している。「区別がつかない論」を口にした瞬間、その人の無知を射抜く。瀬戸博士はそれを認知できなかった。さらには、評価において二重基準を採用しその論文をはばかりることなく公表してもいる。研究にとって致命的欠陥があるという認識がない。さすがに私がいうところの「林紓を詐欺師に認定し林紓の名譽を毀損する瀬戸博士」だけのことはある。面目躍如といったところだw 罫

【注】

1) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29

2) 瀬戸宏「文明戯「肉券」について」(『中国文芸研究会会報』第54号1985.7.30) 16頁。「文明戯「肉券」はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亞所著……」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている。「シェイクスピア」と表記する。また「……」を使用する。

瀬戸宏『中国話劇成立史研究』(東方書店2005.2.25) 128頁では「文明戯『肉券』はその幕表の冒頭に「是劇出自英国文豪莎士比亞所著……」とあるように、シェイクスピアから出た作品であるという自覚をもっている」というように「……」を使用する。

3) 范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』上海・中華図書館1914.6 / 上海・文匯出版社2015.10復刻本による

4) 鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』上海・中華図書館集成公司1919.4.10 / 北京・学苑出版社2016.1影印本による

5) 范石渠原著、趙驥校勘『新劇考』162頁の注1

清末小説から

崔文東氏より資料をいただきました。感謝します。

曹 培根 時萌文学年表 『書鄉漫録』石家莊・河北教育出版社2004. 12

王 繼權 略論近代的翻譯小説 復旦大学中文系編『卿雲集続編 復旦大学中文系八十周年紀念論文集』下 上海・世紀出版集團、上海古籍出版社2005. 12

付 建舟 『近現代轉型期中国文学論稿』南京・鳳凰出版傳媒集團、鳳凰出版社2011. 6

『近現代中国文論の轉型』付建舟、黄念然、

- 劉再華 上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2015.8
『清末民初小説版本経眼録・清末小説卷』北京・中国致公出版社2016.1
清末民初新小説廣告の文学史意義(代前言) 『清末民初小説版本経眼録・清末小説卷』北京・中国致公出版社2016.1
『清末民初小説版本経眼録・民初小説卷』北京・中国致公出版社2016.1
民初市民作家的文学觀念及其意義(代前言) 『清末民初小説版本経眼録・民初小説卷』北京・中国致公出版社2016.1
- 許俊雅 少潮、觀潮、儀、耐儂、拾遺是誰?
《台湾日日新報》作者考証 『台湾文学學報』第19期 2011.12 電字版
林紓及其作品在台湾考辨 『中正漢学研究』2012年第1期(總第19期) 2012.6 電字版
誰的文学?誰的產權? 日治台湾報刊雜誌刊載中国文学之現象研探 『台湾文学學報』第21期 2012.12 電字版
日治時期台湾報刊小説的改写現象及其叙述策略 『台湾文学學報』第23期 2013.12 電字版
日治台湾<小人国記>、<大人国記> 訳本来源辨析 『台湾文学學報』第27期 2015.12 電字版
- 張真 新世紀以来日本中国俗文学研究回顧 『陝西理工学院學報(社会科学版)』2014年第1期(第32卷第1期) 2014.2.20
- 国蕊 陳冷血の翻譯小説『生計』に対する一考察 九大中国文学会 『中国文学論集』第42号 2013.12.25 電字版
陳冷血による翻譯小説の底本に関する考察 『跨境:日本語文学研究』第1号 2014.6 高麗大学校日本研究センター 電字版
「那破侖帝后之臨終」と慈禧太后的死:陳景韓の翻譯小説にある報人特徴への一考察 九大中国文学会 『中国文学論集』第43号 2014.12.25 竹村則行教授退職記念号 電字版
- 陳景韓对第一人称叙事小説翻譯的探索 『明清小説研究』2016年第4期(總第122期) 2016.10.15
劉蕙孫子女編 『余匯集 劉成忠、劉鶚、劉大紳、劉蕙孫四世詩存』私家版(壹号文化伝播有限公司印刷制作 2016)
夏曉虹 『晚清女子国民常識的建構』北京大学出版社2016.1 學術史叢書
朱曉慧、莊恒愷 『林紓 近代中国訳介泰斗』福州・海峽出版發行集團、福建人民出版社 2016.5
陳平原 『作為学科的文学史:文学教育的方法、途径及境界』北京大学出版社2011.2 / 2016.5第2版
李怡 『問題与方法:民国文学研究』台湾・文史哲出版社2016.8 民国文学与文化系列論叢2
胡全章 『中国近代作家片論』北京・中国大百科全书出版社2016.9
楊湯琛 從晚清域外遊記看現代国民意識的興起 『中国現代文学研究叢刊』2016年第9期(總第206期) 2016.9.15
馬棟予 【書評】“Modern Chinese Literature”等於“中国現(当)代文学”嗎? 評張英進主編《現代華語文学手冊》 『中国現代文学研究叢刊』2016年第10期(總第207期) 2016.10.15
陳曉明 重新想像中国的方法 王德威的文学批評論 『中国現代文学研究叢刊』2016年第11期(總第208期) 2016.11.15
朱静宇 評樂梅健主編《中国近代文化轉型与文学現代化》叢書 『中国現代文学研究叢刊』2016年第11期(總第208期) 2016.11.15
橋川時雄著、高田時雄編 『民国期の學術界』臨川書店2016.11.30 映日叢書第3種
《老書店》編輯組編 『老書店』北京・中国文史出版社2017.1 韓淑芳主編『民国趣讀』
李欧梵 “高蘭麗女史”是誰? 『文匯筆會』 2017.2.13 電字版